



創立60周年記念号

平成25年6月1日発行

舞鶴赤十字病院

日本赤十字社

編集発行:舞鶴赤十字病院

〒624-0906 京都府舞鶴市字倉谷427

TEL 0773-75-4175 <http://maizuru.jrc.or.jp/index.htm>



ごあいさつ ～舞鶴赤十字病院創立60周年を迎えて～

院長 西田 和夫
にしだ かずお

舞鶴赤十字病院は平成25年6月1日に創立60周年を迎えます。10年前の50周年では、創立以来はじめて記念誌の刊行もされました。今回は職員を対象にささやかな催しと、市民の皆様に向けてのスポーツ講座が予定されています。

この10年の間のもっとも大きな出来事は、中丹医療再生計画案をめぐり京都府、日赤支部も交えた議論が繰り返され、まさに舞鶴赤十字病院にとっては激動の時期でしたが、平成23年11月に京都府は中丹医療再生計画の変更案を採択し、翌年3月厚生労働省がこれを承認し、病院の方向性が確立されたことです。舞鶴赤十字病院は急性期病床が150床そのままで、療養病床48床を回復期リハビリ病床48床に転換し一般病床198床の病院となります。本年4月よりは医師住宅の建設が始まり、それに引き続いて現在の医師住宅、および浄化槽の解体が行なわれ、そしていよいよ回復期リハビリ病棟、リハビリテーションセンター、緊急時放射線検査施設などが入る東館の建築が始まります。さらに時を同じくして東隣には療養病床に特化した機能を有する舞鶴市民病院の建築も開始されています。来年の今頃には病院周辺の景観が様変わりしていることでしょう。

また病院内部に目を転じてみると、本年9月には電子カルテの更新がなされる予定で、外来部門、病棟部門のオーダーリングやカルテのペーパーレス化に向けて職員一丸となって取り組んでおります。また舞鶴市ではじめての回復期リハビリ病棟の設置に向けて、市内外の病院との連携を強化しスムーズな運営ができるよう体制を整えているところです。一昨年より施行している7対1看護は、その手厚い看護力により急性期病院としての機能を維持するための必要条件と捉え、さらに優れた看護師の積極的な確保が重要課題となります。病院機能の充実にはDPC(包括医療費支払い制度)の導入が病院運営の面からも避けることはできません。東日本大震災での福島原発事故の教訓から原子力医療の重要性に鑑み、また京都府の要請による緊急時放射線検査施設の館内設置に伴い、被爆医療の研修が当院に課せられています。

今回、舞鶴市により本年4月に正式に設立された舞鶴地域医療連携機構の理事長として弘中武前院長が就任されました。この機構は舞鶴市の救急医療の充実強化、病院間・病診間の連携強化、医師確保の推進などが主な事業内容であります。舞鶴市の医療政策をどのように執行するかを考える重要な組織となると思われますので、当院のみならず舞鶴全体の医療が今後少しでも前進する方向に動いてくれることを期待しております。

結びにあたり、これまで病院を支えていただいた、関係各位、諸先輩方、ならびに病院職員の皆様に感謝を申し上げてご挨拶とさせていただきます。



完成イメージ図



舞鶴赤十字病院創立60周年に想う

名誉院長 吉江 住次
よしえ すみつぐ

舞鶴赤十字病院は還暦を迎えた。心から祝福し、この長い年月、職員や他の大勢の方々のご支援に深く感謝申し上げます。共に生きてきた庭の桜も松もさぞかし喜んでいることでしょう。

今回は超高齢者となった今も忘れ得ない病院運営の根幹を搖るがした貧乏と医師不在の事を述べさせてもらいます。

私は創立3周年記念行事の日に当直要員として派遣されました。高い板塀に囲まれた広い草原の中に「コ」の字型の大きい木造二階建の建物が広がっていました。これが初対面の舞鶴赤十字病院でした。その後、間もなく原爆に遭われた若い先生が病欠となり、その応援に赴きました。なかなか帰してもらえず、一年半勤めて帰校したが、半年も経たずに今度は内科医長として赴任しました。よくよくの縁でした。

病院経営は当初より思わしくなく、累積赤字が雪だるま式に増加し病院存亡の憂き目に遭う事となった。本社医療監理機構より二名（大阪赤十字病院、京都第二赤十字病院の院長）が調査に来られ、後から衛生部長が見え、医局にも意見を聞いて帰られた。結局、当時の院長は弊履院長という言葉を残して去られた。お気の毒なことでした。

後任はなかなか決まりず、話が私に廻ってきて逃げる事も出来ず、この地を墳墓の地と決心して引き受けました。京都府支部の意向により、当時の庶務・会計・医事課の三課長も退職し、課長職は置かずに係長が課の長となつた。事務部長は暫くして退職し、後任は内部から採用した。実に大変な人事が行われたものです。

私の使命は米も薬も断られる様な貧乏な独立採算制の病院を立て直し、潰さない事でした。京都府支部も何かと協力してくれ、職員も現状をよく理解して骨身惜します働いてくれました。診察に一生懸命励むと共に赤十字病院の特色である医療社会事業に力を入れた。家庭看護講習会は定期的に続けられ、評判を呼んだ。国民皆保険となり、成人病という言葉も生まれた時代で、健康相談、健康診断や講演など実によく地域を巡回しました。救急業務は救急車を置き、運転手も夜間泊り込んで積極的に勤め、また機能訓練や人間ドックなどが近辺に無かったので、これらも開始しました。病院の評判も良くなり、患者は患者を呼び経営は安定し、昭和43年に念願の全面改築の幸運に恵まれました。先年、看護部長が表彰されたり、地域のリハビリセンターに指定されたりしたのも何かこの時代と繋がりがあるようで嬉しいです。

二回目に襲われた病院の危機は、昭和40年代半ばから50年代へかけて燎原の火の如く全国へ拡がった大学紛争が原因で、地方の公的病院は大学からの医師派遣が止まり、逆に医師が一人二人と引き揚げられ、診療科が休診に追い込まれました。院内には医師の姿が少なく淋しいことでした。常勤医師が私一人になり一年続いたこともありました。内科・外科だけはどうしても残したかった。幸い国立病院の外科医長鹿野先生が全面的に援助して下さいました。大学紛争が終息した後、大学内科の近藤教授が国立病院長と共に見えて、援助の手を差し伸べて下さいました。内視鏡を修業した若い先生が続いて来てくれ、また他の科の先生もポツポツ赴任し、病院廊下に医師の姿が見えるようになりました。鹿野先生と近藤先生、このお二人のご恩は生涯忘ることはありません。

地方の公的病院の医師不足は宿命的なことあります。便利な都会へと移り住む風潮の中、医師とて例外ではありません。医師本来の使命感の高揚と制度改善が望まれる。今、お勧めの先生方はよっぽど御奇特な方々であり、感謝しなければなりません。

病院経営の経験者が舞鶴市長となり、色々と計画が進められております。舞鶴赤十字病院のリハビリ部門が地域のリハビリセンターとして増改築され、市民病院が隣に建ちます。相携えて地域医療に貢献できる良いことです。

舞鶴赤十字病院よ。人道・博愛の理念に燃え、地域に相応しい立派な病院として伊佐津川の辺に永遠に栄えんことを。



創立60周年記念誌発刊に寄せて

名誉院長 横田 敬
よこた けい

この度、当院は創立60年と言う節目の年を迎えた。御目出度いことです。私が当院を辞して11年の歳月が流れた。所謂若葉マークの内科医員として、内科部長として、そして院長として、この病院に去来すること3度、通算21年の歳月を過ごした舞鶴は、舞鶴日赤は今もって懐かしい。

それだけに舞鶴の、取り分け西舞鶴の医療の現況を憂慮している。私が舞鶴を離れて2年後、卒後医師の臨床研修制度が改められ、新研修制度が発足した。前後して特に地方における医師不足が殆ど期を一にするように全国各地に発生し、地域医療の崩壊が大きな問題となった。舞鶴もその例に漏れず、しばしば全国的に斬新でホットなニュースを発信していた舞鶴市民病院でも、内科医14名中13名が退職するという事態も発生した。

当院でも関連大学の医局の要員不足、研修病院の指導医の確保、指導体制充実のためにベテランDrが異動し、診療科によっては欠員の状態が続いている。研修制度発足の直前までは大学関連病院等会議でも、漸く数は足りてきたが良いDrが欲しい、Drの量より質が要求される状況になってきていた。確かに研修医師にとって新研修制度は有意の制度として評価されているが、反面実施に当たり地域医療が被る影響についてどれだけ配慮がされていただろうか。地方の病院にとっては、新制度の発足は紛れもない医師不足の元凶の一つに違いない。

先の舞鶴市長選でもこの医師不足の解消、地域医療の再建が大きな争点となった。病院の医師不足を解消し、舞鶴の医療崩壊を防ぐ上で、それぞれの施設の歴史的地理的存立の背景、交通事情に十分な配慮が望まれる。

その意味で今進められている東西の地域バランスに留意し、各疾患別のセンター化を図り、それぞれの病院の特色ある分野を生かして機能の充実に努めるとする舞鶴市の医療再建構想を私は是としたい。

東地区の基幹病院への1極集中は、西舞鶴市民の足の不便性に目を瞑れば、合理的で医師不足の解消にはみえるが、西舞鶴市民が置き去りにされ、遂には商店街の衰微に通じることになるのではと、私は危惧していた。通院するのに、西舞鶴から東舞鶴に行くのに東西に立ちはだかる山をトンネル経由で行かねばならぬ違和感、バス・JRの便数の少なさ（1時間1便）、殊にバスに至っては最終便が午後8時。運賃が往復結構かかること。タクシー料金ではなお更。道路事情は良くなつたが、50～60年前から交通事情は殆ど改善されていない。また当院は昭和28年、当時病院施設皆無だった西舞鶴市民の切実な要望でできた経緯のある病院であり、今もその事情に変わりはない。

創立60周年の節目を期に、心を新たに西田院長のもと、職員の皆さん相和し相協力し、西地区に不可欠の病院として更なる発展に尽力頂けるよう願っています。



海軍工廠→中学校→病院へと変化（昭和28年）



2代目本館（昭和43年）



舞鶴赤十字病院の歴史に想う

前院長 弘中 武
ひろなか たけし

丁度10年前の2003年、病院長就任の翌年に舞鶴赤十字病院創立50周年を祝う事業を経験させて戴きました。初めての舞鶴で、まして全く無知の病院の歴史ですが、それでも何とか見聞を貪った結果、創立以来の歴史を垣間見ることができました。そして、感じたことは、この50年の歴史は存亡の危機を繰り返し乗り越えてきたという一まるで大波に揉まれて壊れかけた舵にしがみついて、なんとか嵐の海を抜けてきた小舟が目に浮かぶような—感動の歴史でした。それにしても当時、病院本館の外観の放つ豪華客船の偉容からはこのような身の上は想像もできませんでした。当時の藤本功事務部長渾身の創立50周年記念誌では、吉江住次、横田敬両名誉院長の貴重な証言が載っています。

それではその後の10年はというと、やはり厳しい航海になったのはこの病院の持つDNAでしょうか。最大の危機は新医師研修制度というとてつもない大波でした。大学への医師の引き揚げは先ず放射線科から、続いて小児科・内科・整形外科・外科・眼科・泌尿器科・麻酔科・耳鼻咽喉科と全ての診療科に及びました。放射線科・小児科・麻酔科と耳鼻咽喉科は医師が皆無となり、全体の医師数は10人を割り込みました。救急車を断るのもやむを得ないことがでした。診療機能の低下は全国的な現象で、舞鶴の他の病院でも同様でした。しかし、捨てる神あれば救う神ありで、京都第一赤十字病院と京都第二赤十字病院から医師を派遣してやろうという支援を戴いたのです。消化器内科・麻酔科・外科・小児科について常勤医と非常勤医の派遣を受け、診療機能は大幅に回復できました。また、整形外科については、京都府立医科大学整形外科の御理解を戴き、引き揚げ前の状態を回復できました。

一方、舞鶴市内では、各病院が医師不足のために窮地に立っている状態でしたので、医師会を含めて協力し合う体制を模索し始めました。舞鶴市が中心となって組織された地域医療あり方検討委員会の中で、舞鶴市全体としての医師不足対応策が協議されました。これはその後、病院再編推進委員会に引き継がれ、舞鶴市の公的病院を一つにするか東西それぞれに配置するかについて話し合いが続けられましたが、私の退職までには結論が出ませんでした。それでも診療科のレベルでは、外科・整形外科と眼科における病院間協力体制がとられた他、医師会の休日診療所の開設など、それまでには無かった一步進んだ連携が組織化されました。

そして、私の退職後の3年間はく脚の運びが極めて順調で、好記録が期待できるぞ>と思って走るホップ・ステップの段階だったのではないでしょうか。西田病院長を先頭に全ての職員の皆さんのが幕末の草奔崛起を想起する団結によって作り出したこのホップ・ステップが、今まさに踏み切ろうとしている次の素晴らしいジャンプを生み出すことを確信し、楽しみにしています。

2013年、この度舞鶴赤十字病院が昇竜の勢いで創立60周年を迎える事を心よりお慶び申し上げます。



現在の舞鶴赤十字病院



創立60周年おめでとうございます

赤十字レスキューチェーン京都

顧問 溝江 幸太郎
みぞえ こうたろう

舞鶴赤十字病院創立60周年おめでとうございます。

未曾有の被害に見舞われた、東日本大震災から早くも二年が過ぎました。日本赤十字社は様々な事業を行っており、特に大地震等の大規模災害が発生した際には、災害救護法に則り行動をします。舞鶴赤十字病院には常備救護班があり、有事に備えています。京都北部はもとより近畿全体の基幹病院としての責任は重要です。全国の医療救護チームの中でも赤十字救護班はその実力・行動力共にプロ集団として異色のものがあります。また、当院スタッフのレベルは災害に対して大変高いものがあり、有事の際に舞鶴赤十字病院を拠点として、巡回診察活動・避難所の衛生状態の調査対応も直ちに実施されます。

これからも私たちの大切な拠点病院として、発展していく様に支援していきたいと思います。

60th Anniversary



舞鶴赤十字病院理念



赤十字理念「人道・博愛」のもと、
一人ひとりにやさしさと思いやりをもって、
いのちと健康、尊厳を守り、
地域医療に貢献します。

人間を救うのは、人間だ。 Our world. Your move.

基本方針

- 1 地域医療の中心的役割を果たすために、
救急体制を整備し、安全で質の高い医療を提供します。
- 2 地域の中核病院として、他の医療・保健・福祉施設と協働し、
地域医療連携の推進に努めます。
- 3 赤十字の使命である災害救護に貢献します。
- 4 健全で合理的な病院経営に努めます。
- 5 快適な医療・療養環境の整備に努めます。
- 6 職員は常に研修・研鑽に努め、病院はこれを支援します。



舞鶴赤十字病院 創立60周年 特別市民講演

『夢をつかめ! ~Catch The Dream~』

日時

平成25年 **6月1日(土)** 14時50分～18時10分
(14時30分 受付開始)

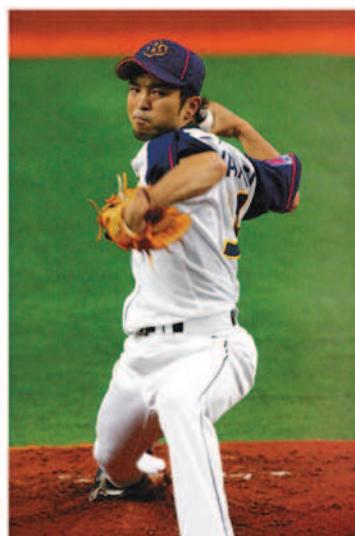
会場

舞鶴グランドホテル

〒624-0854 京都府舞鶴市円満寺小字横八丁124 (JR西舞鶴駅前)
TEL 0773-76-7777 FAX 0773-76-5184

**先着
150名様**

事前お申し込みが
必要です



高島 誠 氏

- 広島県立広島商業高校
- 四国医療専門学校
- オリックス・ブルーウェーブ
トレーナー
(現オリックス・バファローズ)
- ワシントン・ナショナルズ
トレーナー

本柳 和也 氏

- 春日部共栄高等学校
- 城西大学
- 日本通運
- オリックス・ブルーウェーブ
- オリックス・バファローズ
(2002-2010)

Program

予防しよう投球障害!

舞鶴赤十字病院 整形外科副部長
仲川 春彦 氏

**Mac式ベースボール股割りメソッド
～野球に必要な柔軟性と動きづくり～**

Mac's Trainer Room代表
高島 誠 氏

僕の経験から伝えたいこと!

元オリックス・バファローズ投手
本柳 和也 氏

お申し込み

お電話にて受付中 月曜日～金曜日 AM9:00～PM5:00 (先着150名様)

お申し込み先: **舞鶴赤十字病院 総務課 ☎ 0773-75-8046**

**紅鶴
創立60周年 記念号**

題字 名誉院長 横田 敬
発行所 舞鶴赤十字病院
舞鶴市宇倉谷427
TEL.0773-75-4175
発行日 平成25年(2013年)6月1日
発行責任者 院長 西田 和夫

編集 石井 郁也、植和田光正、坂根 章彦、橋村 抄子
長谷川智子、藤原 朗、山下さとみ、若槻 翔
(50音順)
ホームページアドレス <http://maizuru.jrc.co.jp/index.htm>
印刷 コザイ印刷 TEL.0773-75-1475